

〔書評と紹介〕

盛田稔・長谷川成一責任編集

## 『図説 青森県の歴史』

鶴田 啓

本書は、出版社が「創業一〇〇周年記念出版」と銘打って一九八七年以来刊行中の「図説 日本の歴史」シリーズ（都道府県別・全四七巻予定）のうちの一冊である。北海道・東北地方では他に、宮城・秋田・福島各県の巻がすでに刊行されている。ただ、写真の収集や図版の作成に手間がかかるためか刊行のペースは速いとは言えず、当初「原則として隔月刊」とされたにも拘らず、配本はこの青森県の巻で一五冊目であり、全巻の完結時期は未定である。

宣伝のコピーには本シリーズの特色として、①「目で見て」理解できる図説的編集と、②「新しい『地方史』（地域の生活の歴史）から日本の歴史を描くこと」が強調されている。また、主要な読者層には専門の研究者よりもむしろ一般の県民を想定していることがうかがえる。じつさい、B5の判型を活かし、カラー図版三二頁、本文（三二二頁）も大多数の頁に写真または図表入りと、たしかに「ヴィジュアル」という謳い文句に負けない体裁になっている。なお本書の執筆者は、本文一四名、コラムや図版などを含めれば計二〇名以上を数え、関係者あげての共同作業であったことが推測される。

さて、本書の構成を示すと、以下のようになっている。限られた字数の中で個々の項目に沿って内容を紹介することはとうてい不可能なので、

視点として強調されていることがらや最近の研究結果にもとづく記述など、本書の特徴（と私に思われる）点のみを\*以下に記した。

〔序説——北方世界へ開かれた地、交流の歴史〕

\*歴史的にみて、青森県の地を「本州の行き止まり」「文化の果つる地」とだけみるのは一面的であり、各時代を通じて北海道や北東アジアへとつながる口、交流・交通の動脈であったことが強調されている。

〔先史・古代〕青森県の黎明／亀ヶ岡文化の世界／弥生文化と稲作の始まり／古代蝦夷（えみし）の時代

\*先史時代の部分では、近年の考古学的発見の成果に基づき、縄文時代における北海道との交流の存在が遺物によって確認されたことや、弥生時代の前期から津軽平野で本格的な稲作農耕が行われている事実が判明したことが述べられている。古代の部分では、当時の中央権力から蝦夷（えみし）や肅慎（あしはせ）と呼ばれた人間集団についての考察、北海道の擦文文化との関係記述などに特徴がある。

〔中世〕津軽・糠部の鎌倉武士／安藤氏の栄光と落日／南部氏による北奥の制覇／中世北奥の文化／境界の中世都市、大鱈・宿川原／馬産の伝統

\*謎の多い安藤氏の系譜と活動、とくに蝦夷（えぞ）、蝦夷地とのかかわりの解明にかなりの頁数が充てられている。そのほか、中世城館や板碑、「中世都市」大鱈・宿川原の記述が目新しい。また「図説」としての目玉とも言えるのが、南北朝から近世初期まで根城（八戸）南部氏の居城であった根城の発掘成果に基づく全貌復元（俯瞰）図である。

「近世」統一政権と北奥／北奥の城と城下町／藩体制の確立と展開／飢餓の風景／『奥民図彙』にみる北奥の生活／北辺の陸上交流と川・海運／江戸時代の旅／幕末の北奥／北の漁撈に生きる

\* 弘前藩・盛岡藩領内に存在した「狄村」（えぞむら）、両藩の藩体制確立や動揺と蝦夷地問題との関係、下北をはじめとする民衆の蝦夷地漁場への出稼ぎなど北奥地域と蝦夷地との結びつきの深さが指摘されている。また、民衆生活・文化の部分にもかなり力が入れているほか、古絵図に基づいた弘前城下町の復元（俯瞰）図二点が目を惹く。

「近・現代」北奥の維新／みちのくの文明開化／底辺からの脱出／交通革命の時代／国家を撃つ眼／北奥の風土と文化／太宰治の土壌／戦争と民衆／焦点としての青森

\* 青森県の農業を代表する林檎生産のあゆみについては、カラー口絵・二色刷イラスト九頁を充てるなど力が入られている。そのほかでは、戦中／現代の部分が生彩を帯びているように思われる。とくに今後の方向性を展望する中で、厳しい現実を踏まえつつも、日本におけるこれまでの「中央」と「地方」の関係に対して鋭い疑問を投げかけていることが印象に残る。

「巻末付録」索引／年表／博物館・図書館一覧／国・県指定文化財一覧／年中行事一覧／参考文献

これらの外にも、「文字使用の始まり」「『つばのいしぶみ』の謎」「白髭水の伝承」「館の成立」「八戸藩の江戸藩邸とその発掘」「津軽の豪農平山家」「津軽塗——定義と呼称」「太平洋無着陸横断飛行」「青函連絡船は消えず」「白神山——ヒューマンインパクトを含んだ生態系の観点から」

など、本文に載せられなかったテーマが各所にコラム形式の記事として挿入されている。

右の内容紹介との重複もあるが、ここで本書の特徴をまとめてみると、以下の二点に集約されるのではないだろうか。

①近年の研究成果の反映。その第一は、新しい考古学的発見の成果を積極的に記述していることで、弥生前期の津軽平野での稲作、縄文文化・擦文文化に見られる北海道との交流の存在、根城の復元などはその代表的な事例であろう。第二は、「序説」にもあるように、時代を超えて北海道、あるいはそれ以北との交流が存在したことを問題意識として強く意識に置いている点である。こうした視点の背景には、「北海道・東北史研究会」の活動やアイヌ民族についての認識の深まりなど、近年の「北方史」研究の活発化・進展が大きく影響していることは間違いないだろう。

②視覚面を重視した編集。これは本書に限らず、ここ十年ほどの顕著な出版傾向でもあり、また一方では図説的な編集に対する批判（視覚では表面的な把握が中心になる——図表や「復元」図はさまざまな手続きの結果出来上がるものであるものも拘らず、読者にはそれが歴史的事実そのものだと看なされる危険性を含んでいる）もあろうが、考古学の発掘作業とその成果（現場・遺跡・遺物）を知るために写真や図は不可欠であり、専門家ではない県民やその地域に対して地理勘を持たない他県の読者にとって、ふんだんに入れられた視覚的な表現は、記述の意味を的確に把握する上でありがたいものである。さいごに、本書を見て気づいたこと——というよりは個人的な感想に

近いが——について若干書かせていただく。

先に述べたように、本書は図版の多用、(通史と言うよりは)項目ごとの記述、多数の執筆者、対象範囲は原則として青森県域、といった特徴を持つ。これらからは、逆に以下のようなデメリットも生じているのではないか。

①見出し項目の制約と執筆者各人の専攻・問題関心の違いのため、見出し間での連続性、その間の歴史的な経緯について分かりづらい箇所が無くはないと思われる。私の能力・知識の限界によるのかも知れないが、原始く古代、古代く中世移行の指標や原因を、本書がどうとらえているかは正直言つてよく分からなかった。またたとえば、農業にかんして弥生時代の稲作の存在と近代以降の林檎栽培についてはとくに詳しく、近世の農具や飢饉についても一応の記述があるが、その間古代・中世の部分ではあまり触れられていない。

②地域区分の問題。青森県域のみで完結しない歴史事象——前近代においてはこれが一般的——の場合、記述が中途半端になる傾向があると考えられる。周辺地域での動静も含めた「時代概説」のような記事があれば、歴史の流れや因果関係について、より把握しやすいものになったのではないかと思う。

各都道府県別の歴史シリーズとしては、山川出版社の手による『県史シリーズ』があるが、すでに各巻とも初版出版後年月を経過しており(青森県の場合、宮崎道生著『青森県の歴史』は一九七〇年刊行)、写真版も鮮明ではなかったため、本書は一般県民向けの歴史書として十分に存在意義があると評価できよう。また、巻末付録の年表、博物館・図書館一

覧、参考文献一覧などが充実しているので、県外の研究者が青森県域の歴史を調べる上での手引きとしても、有用であると思われる。

(河出書房新社、一九九一年七月刊、B5判、本文三二二頁・付録三九頁、定価五〇〇円)

(東京大学史料編纂所助手)